

ある英文学者の肖像

——壽岳文章——

中 島 俊 郎



図版1 壽岳文章，静子

壽岳文章にはさまざまな貌^{かたち}があった。まずウィリアム・ブレイクを専門とする英文学者でブレイク研究に多大な貢献をした世界的な業績をもつ。ついで衰退の一途をたどっていた和紙の復興に情熱を傾けた和紙研究をあげなくてはなるまい。さらに柳宗悦、黒田辰秋、浜田庄司などと立ちあげた民芸運動の推進者でもあり、独自に造本した私家版を刊行した出版人でもあった。専門分野が先鋭化される現代の基準から見ると、ともすれば分裂した個性に映りかねない。現実にはむしろ逆である。こうした大きな三者の核がつねに結びつき、統一を求めて、個人のなかでたえずひとつの連続性をかなでて、強靱な統合性をうみだしていったのである。本稿の中核をなす向日庵版という私家版の出版は、まさにこのような精神を具現化した営為であったといえよう。(図版1)

はじめに——生の軌跡

壽岳文章は、1900年3月21日に兵庫県三田市に近い、「播磨と摂津の接点」の地にある真言宗高野派龍華院に生まれ、規矩王麻呂^{きくおうまろ}と命名された。真言宗には密教的な傾向が多分にあり、ウィリアム・ブレイクの神秘主義的世界観と結びつき、壽岳独自のブレイク観を形成していくことになる。1910年、養家の姓を継いで壽岳となり、得度して文章と改名した。1919年、東寺に

あった真言宗立京都中学校を卒業後、関西学院高等部英文科に入学する。ここで夫人となる岩崎静子と出会う。壽岳がさまざまな社会問題に関心を寄せるようになったのはまさにこの頃である。神戸市立葺合実業補習学校という夜間学校の英語教諭を兼務していたが、この学校は社会運動家で知られるキリスト教徒、賀川豊彦が労働運動をしていた現場に近接していたからである。困窮者の環境をつぶさに観察し、現状打破をうながされる現実を日々見るところとなった。

一方で1914年、柳宗悦が25歳で『キリアム・ブレイク』という700ページ余の大冊を出版していた。一読し、卒論論文にブレイクをとりあげようと目論んでいた壽岳は感激にかられ自分の求めていた世界がここにあると感じとり、大正11年(1922年)意を決して東京にある高樹町の柳の自宅を訪ねた。木喰五行上人調査のため、柳本人は留守で、無造作におかれた陶器などに忘れがたい思いをとどめて帰ってくるが、関東大震災で柳宗悦が京都に移住してから濃密な交誼をいそしむことになる。1923年には静子と結婚、1924年には京都帝国大学文学部選科に入学し英文学を専攻するが、苦学生であり中学校二校で33時間以上も教え、その他に家庭教師として三人の学生を教えて家計をまかなった。家庭教師をしたひとりの学生に、河上肇の夭折した長男である政男も含まれていて、河上から生涯にわたる感化をこうむる契機となった。「人間の成型ができてゆく多感な青年期に、学問上の弟子でもない私が、博士とめぐりあえたことを、いまふりかえって、私は長い生涯での好因縁の一つに数えずにおられない」(「私の処女作と河上肇博士」『読売新聞』[1974年4月28日号])と語っているほどである。

河上肇の奨めでチェルトコフが書いた『晩年のトルストイ』(1926年)という翻訳書を岩波書店から出版した。1922年に発行された英語訳本から重訳したことについて、「語学の一学究である私は深く自己の良心に恥じる」と「譯者序」に書いた。だが、この訳書は正宗白鳥などが称賛することになって、倉田百三などの知己をえる。京大を修了した1927年、ブレイク没後

100年を期に、京都博物館で柳宗悦、山宮充とともに「ブレイク没後百年忌」を開催した。同時にこの頃、黒田辰秋、柳宗悦などと上賀茂民芸協団（京都市上賀茂にあった民芸運動の実験工房）を組織し、ブレイク研究と民芸運動が両軸となっていく。1929年には龍谷大学文学部講師となり、また、この年にはブレイク研究の世界的水準を凌駕する『キリアム・ブレイク書誌』を刊行し、英文学研究雑誌『みをつくし』（ぐろりあ・そさえて）を発行する。翌年には京都大学英文学会での講演をもとにした『書誌学とは何か』を出版、そして研究誌『ブレイクとホキットマン』（全2巻24冊刊行終刊）という、柳宗悦と協力して個人雑誌を刊行し、1932年には関西学院文学部講師に任ぜられる。西向日市に向日庵をかまえ、ブレイク訳詞集『唯理神之書』を向日庵版として翻刻した。

1937年、有栖川宮記念学術奨励金をえて日本各地に残る和紙製造の実態調査を手がける。民俗学者、宮本常一をして「これが本物のフィールドワークだ」と感嘆させた調査結果を、1943年、『紙漉村旅日記』として向日庵私家版で出版する。

そして1952年、新しい大学をつくるために甲南大学文学部に主任教授として招聘され1969年まで教鞭をとり、英文学、図書館学を講じる。1953年、京都大学文学部に提出した博士号学位請求論文 *A Bibliographical Study of William Blahe's Note-Book*（『ウィリアム・ブレイクの備忘録の書誌学的研究』）は国際的に認知された業績となった。さらに1970年、『壽岳文章・しづ著作集』全6巻が春秋社から刊行がはじまる。

さらに世界の一大傑作であるダンテ『神曲』を7年以上もの歳月をかけて訳出し、1975年12月8日、畢生の訳業を完成させた。多くの作家、識者、読者から激賞され第28回読売文学賞の荣誉にかがやく。授賞式で「この賞は一つのを成しとげた人に与えられる、おとなの賞だと思う。諸先輩が受賞した末に私がいただいたことは、老木に花の咲いた思いがする」と授賞の辞を述べた。1981年6月27日に静子夫人が逝去し、1992年1月16日、壽岳文章は永眠した。

I 精神の形成

壽岳は自伝の断片を多くの機会にもものしているが、まず精神形成の嚆矢として紙との出会いがあったのは興味深い。紙への想いは7歳の頃に遡る。風光明媚な自然が残っている明石川の上流で、学童の文章少年の目に留まったのは素朴な水車小屋で、反古紙をもう一

度再生させるために、老婆が白でついている光景であった。

落とし紙にしか使えない粗末な塵紙であったにせよ、手漉きの紙には違いない。今思いかえすと、登校や下校の途次、その粗末な紙漉小屋に異常な興味を覚え、つい立ち寄らずにおれなかった学童は、私のほかには無かったようだ。そしてそれが私の、その後八十年近くもほだしを深めてゆく和紙との最初の出会いであった。私は七歳になったばかりの幼童であった。（『和紙とわたくし』『本の正座—独語と対談』[1986年]）

ここで「異常な興味」という点に注意をうながす必要がある。「なぜ紙にそのような好奇心が植え付いたのか」という疑問がおのずと生じてくる。この引用からだけでは推し測れない部分があるにせよ、反故紙をつきこなし、漉いて再生させる様子に、自己を投影させていたのではないだろうか。押し潰されても生まれ変わる紙の強さ、そしてコウゾ、ガンピ、ミツマタという原材料から自然のままに製品となってくる、その反工業的性格を後年の壽岳はみてとったのであろう。戦争が色濃く影を落とす当時の世相や、そして貧困ゆえの両親の不仲、さらには自分の宗教観からくる死の恐怖をかかえながら、ここに書かれているような牧歌的な田園風景ばかりを謳歌していた文章少年ではなかったようだ。

さらに壽岳が精神的な始原ともいえる「現場」を巧みにとらえている一文を読んでみよう。『嶽水会雑誌』という第三高等学校の雑誌を目にしたとき、壽岳はその高踏的な編集ぶりに感嘆したという。奥付の印刷所を調べてみたら、三条麩屋町の旧丸善に近い點林堂^{てんりんどう}であり、そこが京都の印刷発祥地である事実在即座に気づく。丸善と點林堂が横並びに存在していた物理的な事実はたちまちのうちに象徴的な意義をおびていくのであった——「大げさに言うならば私の精神発達史に於いて、このふたつの店が同時性・同処性をもって、まず書きとめておきたいのである」（「丸善京都店」『学燈』[1951年10月号]）

ここで「同時性・同処性」という詩人ウィリアム・ワーズワスの詩句を喚起させるような言葉に注目しておこう。自己の人生にとって決定的な時、場をあらわす言葉であるのはいうまでもないが、重要なのは、點林堂と丸善、つまり本を生みだす現場である印刷所と外国文化が輸入されてくる現場である丸善が不可分な

かたちでひとりの人間のなかに結ばれていたという点である。

壽岳が入学した関西学院は摩耶山麓の南傾斜地、原田の杜に、明治22年（1889年）に創立された私学である。「神戸を少し山手に離れて、六甲摩耶の諸山を背後にいただき、淡路島の右手にみて玩具の舟を浮かべた盆のような摂津湾を一目に眺めるその位置すら過ぎたるものやに思はるるに、教場、寄宿舎、食堂、礼拝堂と幾棟となく建て離して、これが学校とはもったいないくらいである」と、徳富蘆花が『思出の記』（1900-1）のなかに「いちまつに並むで居る」学舎を書きつけたのは、文章が入学するほぼ20年前のことであった。後年、文章は、「カナダ・メソジスト教会との連合経営によるこの学園で四年間すごしたことを、私の英語学上、たいへん幸福であった」とふりかえり、学院長である吉岡^{みくに}美国に英語を習ったことを生涯の徳として感謝している。（「わが思い出の英語人」『英語教育』（1975年10月号））

若き日の文章は関西学院で英文学を専攻するかたわら、神戸市立葺合実業補習学校で英語の専任教員に任命された。当時、神戸市では神戸製鋼所、川崎造船所などで働く勤労青年のために、小学校の校舎を利用して夜間学校が開校されていた。市内にはそのような夜間学校が5校あったが、葺合実業補習学校はそうした夜間学校の一校であった。文章は夕方の4時から夜の10時まで教壇に立った。

同地域には賀川豊彦が明治42年（1909年）9月頃から伝道を開始した葺合新川が校区にあり、賀川自身も文章が教えはじめた大正6年（1917年）に夜間学校を開設し、その11月には日暮通6丁目に歯ブラシ工場を設立し、教学と労働の両面で貧困者を救済しようと自らの活動を推進していった。賀川によれば、「棟割長屋の汽車の様なものに一坪半位の家が鈴なりに連なっているのである。そして畳が二畳敷。それにある家には9人も住んでいるものがあつた」（賀川豊彦『貧民心理の研究』[1915年]）という。文章は「社会のひずみを膚で感じ取ることができた」と自伝的断章に書きつけている（寿岳文章、しづ「私たちの歩んできた道」春秋社版『寿岳文章・しづ著作集』[1970年]）。

当時の文章の心をとらえて離さなかった文学作品に『アミエル日記』（1881年）がある。後年の述懐によれば、この『日記』について、「音楽家の解釈にみる説得力、自然に対する鋭い観察—これらはともするとあらあらしくなる気持ちをやさしく救ってくれた」として、「もっとも印象的な」本となった（「私の読書歴—

ベルグソンが礎石に——忘れられぬアミエルの感激」『神戸新聞』[1965年11月12日号]）。種々の英語雑誌に注釈をほどこすなど雑文を書き生活費を稼いでいたのだが、『アミエル日記』の一節に文語調の訳語をつけ、そのなかにみずからの叙情を重ねているすがたは微笑ましい。

21st September, 1868 (Villars). —A lovely autumn effect. Everything was veiled in gloom this morning, and a gray mist of rain floated between us and the whole circle of mountains. Now the strip of blue sky which made its appearance at first behind the distant peaks has grown larger, has mounted to the zenith, and the dome of heaven, swept almost clear of cloud, sends streaming down upon us the pale rays of a convalescent sun. The day now promises kindly, and all is well that ends well.

「1868年9月21日。ヴィラルにて。—美はしき秋の気色。よろづのもの今朝は幽暗につつまれて、雨を含める灰色の霧、我等と重畳たる山々との間を立ち迷っていたが、青空のはし少しばかり 杳かなる嶺のうしろに見ゆるかと思えば、たちまちに広がりて、天頂に登りゆき、今は大空の圓屋根、雲おほ方霽れわたりて、勢づいた太陽の薄光りをば我等の上にふりそそぐ。どうやらよい天気となるらしい。げに終りよきものはすべてよきかな」（『壽岳紫朗「アミエル日記抄」『英語研究』[大正14年3月号]）

こうした語学雑誌のページの余白に、「これを書きながら思い出すのは、数年前私がまだ神戸に居たころ、ある冬の日曜の夕方に、場末の汚い古本屋で、スペイン語訳の Amiel の日記を見つけた時のことである。誰が売り捨てていったのか、その書物は埃まみれのまま、うすら寒い冬の日の光に背を晒していた。Amiel の日記が、Spanish にも訳されているのを知った私は、何かしらなつかしい気持で上筒井の下宿の方へ帰って行った。あの本屋も今はどうなったことだろう。あの時見つけた Amiel の日記は、ひょっとしたらまだその店の書棚の片隅に淋しい姿を見せているのではなかろうか——」と、置き去られた一冊の本にそぞろな感慨をもよおすあたりに、後年にみられる愛書家のすがたが垣間見られる。当時、阪急電車の始発駅が上筒井であったため、なつめや書店、白雲堂、後籐書店などの名だ

たる古書店が軒をつらねて古書街を形成していた。

壽岳は自己の人間形成に影響を与えた人物として、ふたりの人物をあげている。「私のようにいっぺんも外国に行ったことがない人間で、そして寺というところに生まれた、閉鎖的な世界に人となった者で、それから中学にしたところで東寺中学というような私立の、しかも真言宗立の学校において、それから関学に行った事は行ったけれど、そういうふうな人間が今までに、もしも交わりを親しくすると思えばできた人間は、数限りなくあるんだが、私はその中で、自然に出会ってくるんだけど、こちらのほうから自ら進んでその出会いを将来に意義あらしめるものとするという、ひとつの選択眼というものがわたしにはあって、誰でも彼でも同じようには絶対になっていない。だから、その中でいまにいたるまで終生のよき知己として河上肇、柳宗悦という存在が、書くことにも、頭の中にも、それがくっきりと大きな二つの出会いの二本柱のようになって今日に至っている」(『壽岳文章、章子『父と娘の歲月』[1988年])。ここで友人ではなく「知己」とふたりのことを述べているのに注目しておこう。自分の心情を深い理解でもって汲み取ってくれるという意味であろう。

壽岳と河上肇の関係については、経済学者、杉原四郎が興味深い一文を残している。壽岳が戦後に書いた『河上肇博士のこと』(『アテネ文庫2』[1948年])と題した単行本の最後に、壽岳は、「この全く風雅の世界を優遊してゐるかに見えもする博士の心底には、下獄当時と少しも変らぬマルクシストが住んでいた」ことを指摘し、河上の文人氣質と併存している志士の情熱が、晩年の会話のはしばしや消息のそこかしこに読みとられたと述べておられるが、『日記』の解題の最後においても、「全巻を読み通して、ずっしりと重く読者の胸にせまってくるのは、日本の未曾有の危機に際し、微動だにせぬ信念を持ち続けたこの筆者の強靱な史観であろう」、またそれは、激動の昭和期に「寸毫も節をまげなかった河上のすがすがしい健在ぶりの表白でもある」と書いておられる。「先生が敬愛してやまないのは、芸術家的風格と古武士の風格とをかねそなえた、志士にして文人、誠実な求道者たる人間河上肇であった」(『壽岳先生と河上肇』『壽岳文章と書物の世界』[1989年])と杉原四郎は壽岳の河上観を別出している。これはまさに壽岳自身と重なってきて自画像ではあるまいか、とまで思えてくる。壽岳が何度も何度も声高に反戦を唱えるために、家族はいつひっばられるかと怯え、心配でたまらなかつた、と述懐し

ている。また、この文脈の延長上に壽岳の書物愛が強い反戦意識、求道的な意味合いをもっていることも忘れてはならないであろう。また、「向日版を起して日本の書物道の樹立にいささか骨を折ったのも」「自国の文物への情熱」ゆえであった、と「対英米の雲行が陰悪になってきた」頃、強調している。(『時局と英文学者』『都新聞』[昭和17年3月5日号])

II 伊藤長蔵とぐろりあ・そさえて

甲南本学図書館に寄贈された平生鈞三郎の旧蔵書は、きわめて興味深い人間関係とそこから派生する文化事象を伝えてくれる。寄贈書の一冊に英語で書かれた、ゴルフ文献の稀覯書 *Golfer's Treasures* (London: St. Catherine Press, 1925) が架蔵されている。編纂者は伊藤長蔵(1950年1月5日没)であり、流布していた種々のゴルフ英語文献からの抜粋をあつめてゴルフ指南書としてのアンソロジーを編むために、ロンドン滞在中の伊藤が鋭意努力して紙質、印刷から造本まで神経を行きとどかせて編みあげたのが本書である。「ゴルフは科学的なゲームであるがゆえに、科学でもって説明し、科学的に習得しなくてはならない」と序文において雄弁に主張し、チャールズ・ダーウィンの孫であるバーナード・ダーウィンが「瞠目する熱意で本書を編む」伊藤のすがたを「前書き」に記している。

ただ、抜粋した記事が不幸にも著作権にふれるものがあり、絶版を余儀なくされたのであった。こうした経緯から編纂されたゴルフ本は稀覯書になってしまうのであるが、この本の出版は伊藤に出版業を開眼させる契機を与えたのであった。長蔵は播磨の素封家である伊藤家の次男として生まれた。兄の貴族院議員である伊藤長次郎は西本願寺の大檀越で、その縁で長蔵は大谷尊由と英国へ同行し、ゴルフに親しむことになる。そして揺籃期の関西ゴルフ界には日商岩井の会頭になる高畑誠一がいたが、長蔵のロンドン滞在中、高畑は鈴木商店ロンドン支店長で、名門アディントンの会員でもあった。帰国後、広野ゴルフ場の設計を実現するために高畑が依頼したのが伊藤長蔵であった。伊藤はゴルフ雑誌『ゴルフドム』(月刊)や解説書を日本で初めて出し、日本ゴルフ界のパイオニア的存在になっていく。

ゴルフ界に貢献したのと同様に、伊藤は昭和初期出版界の輝く星でもあった。出版社「ぐろりあ・そさえて」を起こし、顧問には新村出、亀田次郎、神田喜一郎、石田幹之助などの錚々たる人士を後立てとして

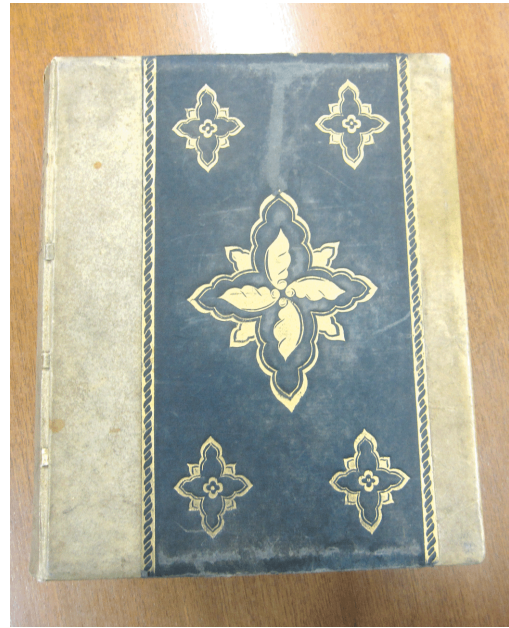
出版事業をはじめたのであった。

新村出を介して伊藤長蔵に会った日のことを壽岳は抑えがたい気持ちでもって振り返っている——「[新村先生を] お訪ねした私の用件は、1927年に百年忌を迎えるイギリス人の詩人・画家・彫版師ウィリアム・ブレイクの書誌編纂に関してであった。書誌の願主は神戸に住む稀代の愛書家伊藤長蔵氏。書物史に不朽の名作を残すジャン・グロリエ（1475-1565）にあやかり、出版書肆『ぐろりあ・そさえて』を神戸に創立した伊藤氏は、早くからすでに先生の眷顧を受けており、出版についてのさまざまな企画の指導を先生に仰いでいたと思われる。伊藤氏の相談に応じ、ブレイク書誌作成の可能な候補者として、私を伊藤氏に推挙されたのは先生であった。私事にわたりすぎるとは十分に承知しながら、あえて以上のことをしたしたのは、不定期刊行物『書物の趣味』にせよ、伊曾保古版本展にせよ、書誌学とつながる伊藤氏の情熱的な仕事は、いつも先生の助言や指導のもとにおこなわれた事実を述べたいためである」（「解説1」『新村出全集 第9巻』[1972年]）。

伊藤は愛書趣味が横溢する出版物を数多く出したが、創業したころ、現在も評価がゆるがない古典としてあおがれる著作を出している。すでに言及したように、没後百年にあたる年に詩人にして版画家であったウィリアム・ブレイクの書誌を出そうという意図を新村に相談したところ、英文学者にして書誌学者である壽岳文章が適任であろうと推薦され、新村を介して壽岳と伊藤は京都大学の図書館長室で会うことになる。昭和4年、ぐろりあ・そさえてから出版された大冊『キルヤム・ブレイク書誌』は、「世界最大のブレイク書誌」（『日本の英学100年 昭和編』）と称されている。（図版2）

そしてもう一冊は、昭和3年に出了柳宗悦の『工藝の道』であり、「柳工藝美学の基本的文献」とうたわれる名著であるが、壽岳が柳に伊藤を紹介してこの出版も実現したのであった。なお平生鈇三郎旧蔵書には伊藤長蔵がぐろりあ・そさえてから定期的に出していた愛書趣味を鼓吹する高踏的な季刊誌『書物の趣味』（全7冊）も架蔵されていることも追記しておこう。

ここで書誌学者・英文学者としての記念碑となった『キルヤム・ブレイク書誌』について、その出版社主の横顔もふくめ詳述しておきたい。「私が今までに親しく交ってきた出版関係の人たちのうち、伊藤氏ほど書物に一途な愛を持ち、その愛を形に現わすために吝みなく財を散じた人を他に知らない」と壽岳は出版人、



図版2 『ブレイク書誌』表紙

伊藤長蔵の横顔を伝えている。「氏はほとんど毎週のように、ときには毎日のように、当時南禅寺畔にあった私の寓居へ、神戸の店から仕事の進みぶりを見に来た。氏は直情径行、一つの事を思いつめると、矢も楯もたまらなくなるといったような、じつに愛すべき性格のあるじである。その代り自分の思うことは、誰の前でも遠慮会釈なく言つてのける。なごやかな話がいつのまにか熱して口角泡を飛ばす議論にかわり、それがさらに白熱して夜が更けても論戦なおやまずというような折も少なからずあった」と、自己犠牲に立ちすべてを注ぎ込み意志を貫徹しようとする出版の現場が生々しく浮かび上がってくる。「当時氏は外遊の旅から帰って、『ぐろりあ・そさえて』を創立したばかりで、新興の意気凌しく、まさに日本のジャン・グロリエをもって任ずる概があった。アシェンデン・プレスや、ゴールデン・コカレル・プレスや、ナンサッチ・プレスの存在を、浮彫のように鮮やかに私の心へ印象づけさせたのは、じつに伊藤氏である」と指摘し、最後に壽岳はここでみずからの出版業について看過できない言葉を吐露している——「私がついに書物道の一筋につながるにいたった因縁の一半は、伊藤氏の出現によるといってもよい。私は自分の書物を作るたびに、必ず伊藤氏のことを思い出す。伊藤氏がずっと出版事業を続けていてくれたら、おそらく私は自分で向日庵私版をおこさず、ナンサッチにおけるメネル、フェイバーにおけるドリンクウォーターの役割を、『ぐろりあ・そさえて』のために果たしていたであろう」（「自装本回顧」『書物展望』[1935]）。これは伊藤長蔵が出

版業をつづけていたら自分は甘んじてその相談役に徹していただろうと壽岳は述懐しているのである。壽岳に書物にたいする愛を芽生えさせ、ついには向日庵本を刊行する契機を与えたのは伊藤長蔵にほかならないという事実をここで明記しておくべきであろう。さらに重要なのは、理想とする書物のすがたが、モリスのケルムスコット・プレスの精神から発したダヴズ・プレスの私家版に向日版の理想がかさなり、その実現に邁進したということである。こうした理想が結実したともいえる向日庵本の代表作『書物』について、理想への実現がいたる経緯をつぶさにたどることができるので後述するとしてしよう。

誰でも最初の著述は興奮がつきものであるが、壽岳も例外ではなかった——「でもいよいよ出来あがって本になった時は騒ぎで、さすがに伊藤氏も私達夫婦も柳さんも興奮した」…。『考えてみると出版者ほど損なもんはない。これだけ私も出版者として苦心を重ねたのに、本が出来てみれば、結局その苦心がみんな著者に取られてしまうんですからな』と、さも口惜しそうに、しかし正直に語った伊藤氏の述懐は、今なお私の耳底に残っている。柳さんは、『ともかく大したものだ』と言い言い、本の背中を幾度となくなでた（「自装本回顧」）。

だが、壽岳の脳裏には大なる反省もやどっていた——「『ブレイク書誌』は、装幀の方面から見ても、たしかに昭和初頭における異色ある出版物の一つだと私は思っているが、あのときはもっぱら内容の充実のみ苦心を払い、装幀方面はむしろ伊藤氏の担任であったけれども、今のやや成長した私の眼から見ると、遺憾な点もまた少なくない。並装本に使った紺紙にしても、今ならもっと強靱な紙——隣の牛皮に負けないような強さの紙が、いくらでも入手できるだろう。また本文用紙は全部局紙を使ったが、今ならもちろん漉漂を入れて特別なものを漉かせているに違いない。活字や印刷インキなども、当時はほとんど印刷所任せで、そのために朱刷の部分がはなはだ醜く、頁が進むにつれて黒インキと混じて牡丹色になってしまった」（「自装本回顧」『平日抄』[1947年]）。用と美が相容れない性質のものであると改めて教えられ、壽岳にとっては華々しい出発点であったが、それ以上に苦い教訓を与えることになった。さらに具体的な言葉に耳を傾けてみよう。

私の書誌は、本文も挿画も全部鳥の子を用い、印刷にはヨーロッパ中世の揺籃期活字本に則って

rubrication（朱刷）を施し、装幀も柳宗悦氏の指揮に従ったため、少なくともヨーロッパ文芸に関して日本で出版された他のいかなる書物よりもすぐれた芸術的な効果を持ちえた。これは私の書誌を見てくださったかたがたに異論のないところと思う。しかしそれは、この書が印刷や装幀のうえから立派にひとつの芸術品として存在するという意味ではなく、また断じてあることを許さぬ。私は必ずしも範をヨーロッパの初期印刷本にとるものではないが、しかし試みにこの書をウィリヤム・モリスのケルムスコット版もしくはコブデン＝サンダスの自装本と比べて見られよ。どこにこの書が芸術的な存在を要求しうる優越性を持つか。用紙の厚薄色彩が異なる点において、字母の形体において、活字の配列において、印刷インキの濃度において、また製本において、そこには多くのみたされざる要求がうっ積している。私の書誌が日本における最も芸術的な書物のひとつであるかのごとくに評せられることは、すなわちわが国の書物芸術がいかに低劣なものであるかを証明することにほかならない。著者と装幀者と出版者ができるかぎりの努力を払ったにもかかわらず、出来あがった結果はこれである。（「総合芸術としての書物」『宗教と芸術』[1929年]）

「結果はこれである」という自嘲気味な言葉に、逆に、制作者としての深い自戒の念を感じることができようか。（図版3）



図版3 タイトルページ

ともあれ伊藤長蔵は若き日の壽岳に多大なる精神的な影響を与えただけではなく、その支援は物心両面にわたっていたといえる。ブレイク百年忌への尽力をみても、それは明らかである。「この展覧会と共に永く記憶せらるべきは、非常な愛書家であり、神戸ぐろりあ・そさえてを経営する伊藤長蔵氏の名である。氏は我等同人の一人壽岳文章が編んだ『キルヤム・ブレイク書誌』の版元である縁故から、この展覧会に要する出費全部を快く負担して下さい。氏の後援なくしては、彼等の企ても或いは実現されなかったかも知れぬ。ここに記して深く謝意を表する所以である」(「序文」『百年忌記念ブレイク作品文献展覧会出品目録』[1927])と、これは柳の筆になるものであり、満腔の謝意を表明している。

出版人としての伊藤を「忘れられない出版」人としながらも、「ところで伊藤長蔵ものに新浪曼派の人たちといっしょに行動するだけあって、生涯ロマンチズムというものが頭から離れなかった。あれだけの金を使い、あれだけ特異な出版をやっておきながら、ついに終りを完うしなかった、後継者をつくり得なかった原因は、やはりもっと冷徹な目で出版とは何かということを見届けなかった、わがままほうだいなやり方を通した、というところに求められるのではないかと思います」(「ある出版者の思い出」『出版ニュース』[1975年])と、後年には冷静な評価を下している。

Ⅲ 柳宗悦

若き日の壽岳文章の精神形成に寄与したのは、伊藤長蔵のほか柳宗悦がいる。精神的な影響という面では伊藤以上の感化力をもたらしたかもしれない。

前述したように、壽岳と柳の友情をはぐくんだのはウィリアム・ブレイクに対する傾倒であった。若き日に両者は協力してブレイク展を開催している。発行された目録には、「今年ブレイクの百年忌を迎ふるや、彼の郷土英国は、出版に講演に記念会に、こころをこめ禮を厚うしてこの天才を追憶した。平素彼の人と芸術とに傾倒せる彼等も亦、いまこの東方の都に彼の作品と文献とを陳列して、その死後百年を記念する展覧会を開く。ただしこれは、百年忌の名によってのみ形式的に行はるる世上一般のそれではない。見る人の胸に彼への愛と理解とを移し植えるために、花を献げ香を拈ずる敬虔のこころをもって企てられた展覧会である。ブレイクの靈よ、願わくは来って我等のこの乏しいけれど真心ある供養を饗けたまえ」(「序」『百年忌

記念ブレイク作品文献展覧会出品目録』[1927年])と、この詩人・画家への愛情をおしみなくそそいでいる。

柳の友情は展覧会だけにとどまらなかった。京都大丸の食堂で冷菓を食した壽岳家の人々はチフスの病魔にとらわれ病臥の身となってしまった。かなりの重態におちいり京大病院に数ヶ月もの間、入院を余儀なくされてしまったのである。かさむ入院費を捻出する必要があったため、柳が自発的にブレイク論集を企画、発行した。まさに友情の花束である。(図版4)



図版4 『ブレイク論集』

此出版は今病床にいる壽岳の為に、私達が企てた論文集です。不幸にも最近母を喪い、父と弟とが大病をし、重ねるに自身の一家三人がチフスに罹って皆入院をしています。若い学者に金の余裕があるわけがないのです。私達は友達として右の本を至急出版し、読者の好誼による金子を壽岳一家に送りたいのです。それで編纂その他一切の責任は私達にあるのです。一冊につき参圓、出来たらそれ以上で御購入被下い。刊行部数は参百冊に限定します。町では売りません。壽岳のブレイク研究が信頼すべきものであるのは、ここに喟々を要しいと思います。(「急告 壽岳文章『ブレイク論集』刊行に際して」[1931年])

壽岳は柳の友情がよほどうれしかったのか、この論集を友人であったイギリスの詩人ロレンス・ビニヨンへ贈呈している。「チフスにかかった我々の入院費を捻出するために柳が発行してくれた」という感激の辞(To Laurence Binyon, with the author's compliments. Kyoto, Japan. 7th March, 1932. Essays on William Blake

by Bunshô Jugaku. Compiled by Muneyoshi Yanagi to comfort the author who was in hospital for a long time with his wife and child on account of typhoid fever, the autumn of 1931.) をつらねて (図版5)。柳は、予約出版で得た三十円を文章に贈った。(「柳宗悦を語る」『展望』[1976年7月号])

*Kyoto, Japan.
9th March, 1932.
To Laurence Binyon,
With the author's compliments,*

*Essays on William Blake
By Bunshô Jugaku.*

*Compiled by Muneyoshi Yanagi
to comfort the author who was
in hospital for a long time with
his wife and child on account
of typhoid fever, the autumn of
1931.*

図版5 壽岳文章の自筆献呈署名

友人として壽岳は柳を高く評価していたが、それは民芸運動の推進者としてばかりか、英文学者としても柳を別格的な存在として尊仰していた。「最近に物故した人たちもこめて、広く日本の英米文学者と言われる人たちの中に、もともと英米文学を専攻したのではない柳宗悦ほど質量共にすぐれた仕事を残した者がほかにあるだろうか」ときわめて皮肉な質問を、壽岳は晩年に発していた。壽岳は文学を人間存在の全体としてではなく、恣意的にしか理解できない同時代の英文学者を多く目にして、文学不理解の一因を「美」を感じることができない感性の欠如にみた。感動もないところに、文学鑑賞がありえないと考えていたのである——「文学は、すべて「美」の問題と深いかわりを持つ。美とは何かわからない人は、文学と相かかわる資格を生まれながら喪失していると言っても、決して極言ではないと私は信じている。ところで、英米文学もこめて、ひとかどの外国文学者と言われる人で、「美」の秘義に対し柳宗悦ほどのすぐれた理解度をもつ人がほかにどれほどいるだろうか。名をあげることは遠慮しておくが、学界ではひとかどの碩学と見なされているこの人に、はたして英文学が理解されている

のか、と思わずしげじけとその顔をのぞきこんだ経験が私に何度かある。そして、平素柳宗悦がそのたぐいの人を物の数に入れなかったのを、私は理の当然と信ずるようになった。柳宗悦は、もともとおごり高ぶって物を言う性格の人では決してなかったからだ(「柳宗悦と英米文学とのかかわり」『柳宗悦全集 第5巻』[1981年])。

壽岳が柳をこのように高く評価したのは、神秘思想の深い共感から発していた。ブレイクなどの神秘思想の理解において、柳は壽岳よりも一日の長があったのは明らかである。神秘思想のどのような側面に両者は、興味をおぼえ、理解の軌を一にしたのであろうか。壽岳がこの問題を柳に直接に質問したときのことを、書きとめている——「あるとき私は、柳における神秘主義思想の価値観について質ねたところ、正しい宗教的思惟にも往々にしてとりつく「我執」や「我見」、つまり教相判積的価値観の誤りを正して、宗教的真理の正しい水平化を实践させる道が神秘主義思想だとの答が返ってきたが、これは全人的な思想家としての柳を理解評価するのに極めて必要な思索過程だと思う」(壽岳文章「柳宗悦と英米文学とのかかわり」)。神秘思想こそ宗教を理解するのに必要な十全な径庭である、と柳は看破し、その見解を壽岳も支持していたのであり、ふたりのあいだに神秘思想への理解が介在していたと考えるのが妥当であろう。

壽岳は、関東大震災で京都へ逃れてきた同じ志の柳宗悦と協力し、『ブレイクとホキットマン』という研究雑誌を二年間、月に一回、24冊刊行した。ブレイクとホキットマンの両詩人がふたりを惹きつける魅力は、主としてふたつであると述べている。まずあげなければならない共通性は「普遍性」である。人間の普遍的な側面にふれて、文学活動を展開しているのはブレイクとホキットマンの二詩人にほかならないという。次の共通点は「永遠性」を指摘する。これらの詩人は永遠という相のもとで歴史、人間に観察を下している。

そして壽岳、柳の両者が同じ靱帯で結ばれているのは、その批評態度であった。柳は、「私は彼[ブレイク]を通して生きようとした私を書いたのです。私は目下の處第三者としての他人の傳を客観的に書く餘裕も興味もないのです。私のブレイクは私に活きたブレイクです。他人のブレイクをどうして私が書き得るでしょう」(『キリアム・ブレイク』[1914年])とそのブレイク研究で高らかに自己の立場を旗幟鮮明にうたったが、壽岳も自己本位の立場をつらぬいた。

従来の英文学者たちが西洋の学者の祖述にいそしみ、何ら顧みることがなかったのとまったく異なる態度であった。ふたりには東洋人として対象を読み解く気構えと矜持があったのである。「私達自身の間に活きているこれら二人の異なる作家を、東洋人としての立場を忘れずに、この一つの雑誌のなかで語ることに却って深い必然さを感じる」(『ブレイクとホキットマン』[1931年1月号])。外国文学と向かい合うとき、西洋人の批評に精通しているだけではつまらない。研究者独自の新しいことを加えられない。それ以上に、対象に肉薄しないことには東洋人としての自分たちの肉となり血となるもの得ることができない。そこまでいかないと文学研究は意味をもたないという痛烈な反省に立っていたのである。西洋対東洋という図式で、両者ともになんら劣等感は抱いていなかったのであった。「一度豊富な東洋の思想や経験からそれ等を吟味すれば、新しい幾多の真理が開発できると思う。悲しい哉今日迄外国文学に志す人々は、東洋の事を等閑にする傾向があつて、本條の研究過程を失っている。その結果仕事は只外国人の既にした研究の研究に止まってしまふ。若し東洋の眼から出発したら西洋に於いてすら等閑にされておる文学を、こちらから先に発見することも出来ると思う。なぜなら手をつけていない部分がまだたくさん残っているからである」(「雑記」『ブレイクとホキットマン』[1931年1月号])と、柳宗悦は自己本位の立場を表明している。この態度は西洋対東洋という一元的な対立軸を超えて、もっと自己に立脚したものであったことも指摘しておきたい。「私は知識の伝達者であるよりも前に、一個の厳正な生活者でありたい。来りてわが生活を見よと云い得る人間でありたい。どんな天分に恵まれた芸術家でも、立派な生活者と言ひ得られぬ者の前に私の頭は下がらない」(「雑記」『ブレイクとホキットマン』[1931年1月号])と、壽岳は生活ありきであるという立場を鮮明にしている。

柳も壽岳も「美よりも用が第一義であり」、両者は補完し合わねばならないという哲理を最後までつらぬいたが、この研究雑誌をつくる時、オランダ紙を取り寄せて、それを新潟に持っていき、同等の紙を漉かせた。ブレイクのBとホキットマンのWを組み合わせた透かし文字と「真理を開く」というロゴを入れた。表紙と題扉の意匠は柳宗悦が、表紙の木版彫刻は黒田辰秋の手になった。

この雑誌で見逃せない側面はひとりのエッセイストの出現である。壽岳文章は生涯にわたり機会あるごと

に三千編近くを草したが、いずれも滋味あふれる味わいがある。「九日の夜に降った雪は、深い樹立に包まれた私の家ではまだすっかり消えない。裏の藪では笹の葉に氷りついたその雪が、時折さらさらと枝を分けて淋しく散る。それでも日のあたる庭先では、霜にいたんで赤茶けた杉垣がほのかに柔ら味を帯びてきた。土を踏めばしっとりと水気が足裏に感じられる。名も知らぬ小さな花が、苔の間から薄い臙脂色の頭をもたげているのを、今日私はみつけた。手水鉢の水も幾日ぶりかで氷が解けて、底に沈んでいた木の葉がほっかりと浮かんでいる。早く春の来るのが待たれる」(「雑記」『ブレイクとホキットマン』[1931年2月号])と、2月の雪につつまれた心象風景を描いているのだが、観察眼をこらし、それでいて自然を素直に見ながら、科学者のような冷静さのなかに自然への愛情も忘れない態度を読みとることができよう。英文学者である戸川秋骨、平田禿木などにつらなるエッセイストの面目躍如たる側面を垣間見ることができる。

さて、昭和9年(1934年)といえ、前年の8年には向日市に新たに居を構え、向日庵私版としてブレイク『無染の歌』『セルの書』などを刊行し、またアメリカ人手漉紙研究家ダート・ハンタアと京都の都ホテルで会い、親交を深め、「肝胆相照」する「強い親和力が働いた」。(「ダート・ハンタア氏との一日」『書物展望』[1933年])。そして9年には式場隆三郎訳『テオ・ファン・ゴッホの手紙』および Lafcadio Hearn, *Letters from Shimane and Kyūsyū* を向日庵版として刊行し、また自著として『書物の道』(書物展望社)を出し、モリス生誕百年を記念して『モリス記念論集』(川瀬日進堂)を中心になって編集し出版している。この論集はケルムスコット・プレスの衣鉢をつぐアシェデン・プレスの影響が深い。でもこの年に大書しておかなくてはならない出版は、「英米文学評伝叢書」(研究社)の第31巻として『ブレイク』(1934年)を担当し、書き下ろしたものである。評価すべき点は、壽岳のブレイク評価がきわめて直截的に開陳されているからにはかならない。研究者と研究対象が一体になっている幸せな例をここにみる。

壽岳はブレイクへの傾倒が自己の仏教への信仰と軌を一にしていることを述べている——「ブレイクが私の心を惹く第一の点は、彼の思想が甚だしく東洋的、殊に大乘仏教的であることに存する。……幼い時から大乘仏教の經典に親しんできた私が、ブレイクに特別の愛情を感じるのはまことに当然である」と切りだし、その理由として「大乘とはあらゆるものを撰取して捨

てざるの謂である。ブレイクは大乘仏教的たるがゆえに、極めて肯定的であり、積極的であり、生命的である」と結論づけている。

そして、「ブレイクが私の心を惹く第二の点は、彼がその一生を通じてヘブライズムへの熱心な帰依者であったことに存する」として、当然、誰もが疑問とするところを解明に込めている——「読者の中には或いは問う人があるかも知れない。衝動の莊嚴を謳歌する大乘仏教的ブレイクと、十字架を背負うてカルヴァリへの路を進むヘブライ的ブレイクは、明らかに矛盾する存在ではないかと。読者よ、それが矛盾でなく存在すると云うことに、経験以前の世界と経験以後の世界とを同時に表現し得ると云うことに、ブレイクが私の心を惹く第三の点であるのだ」と喝破している。そして、「神秘道はあらゆる宗派を一つに結ばしめる」という洞察こそ、壽岳が求道したものにはほかならない。

「第四にブレイクが私の心を惹く点は、彼が芸術家であったことによる。真理は万人の共有であり、それが開明せられる道は一つに限らぬ」とか、「最後に、しかし最小ではなく、ブレイクが私の心を惹くのは、彼がつつましい衣食住に安じて、妻カサリンとの美しい生涯を送ったことである」などをブレイク傾倒の理由としてあげているが、「神秘道はあらゆる宗派を一つに結ばしめる」という見解があつてのものである。『ブレイク』は新書版で、ページ数130余の小著かもしれないが、壽岳のブレイク研究の要諦が結実しているという意味で、「壽岳氏には、この重大な書誌に反して、軽快な著書もある。それは『研究社英米文学評伝叢書』中の『ブレイク』であり、邦文入門書としては最もすぐれたものであろう」（齊藤勇「柳宗悦氏の名著『キリアム・ブレイク』及びその後のブレイク研究について」[1981年]）という評価は妥当なものである。ひとつの入門書が半世紀にわたり生命力をもつというのは稀有なことであろう。

IV 向日庵私家版

壽岳文章にとって、「向日庵」という言葉にはふたつの意味があつた。ひとつは向日庵版という私家版の発行所を意味し、もうひとつは向日庵という文化サロンを意味した。壽岳は、住居のある地名にちなんでその草庵を名づけたが、さらなる意味を含めようとした。「到着はやがて出発である。雑誌『ブレイクとホキットマン』は休刊の已むなきに立ち到ったけれども、胸に溢れる思いを何かの形に盛ろうとする私の欲念はい

ささかの退転もなく、少数ではあろうがしかし熱意ある読者の力のみを頼りにして、私は遠く離れ、ただただ良心の声のみに耳を傾け、すぐれた内容に美しく正しい装いを与え、思想と工芸との二つの世界を密に結び合せようとするのが私の願ひである。この私版は、太陽の彼岸を求めてやまぬ向日葵を歌ったブレイクの詩と、同じくその花を愛した画家ファン・ゴッホにちなんで向日庵と名づけられた。茶の実の紋が、今後向日庵私版本の題扉に、装幀に、また新しく紙が漉かれる場合にはその漉入に用いられる標識である」（「向日庵発願記」『ブレイクとホキットマン』[1932年11月号]）と、以後、陸続と出版されていく私家版の生誕地から産声がきこえてくる。ブレイク詩集の翻刻版など多くの良書を出したが、この出版活動が壽岳夫妻の共同作業であったことは大書してもいいであろう。それまで出版業は柳との共同雑誌をもって助走をしていたので、初めての作業ではなかった。ふたり力を合わせ雑誌のページになる1500枚の紙を一心不乱で折っていく。折作業に三日かかり、次に製本にこぎつける。「好きものの暇人の行為」と誤解されながら、ひとつの美意識が、ものに集中するということが、便利、能率を第一義にする現代生活からは理解を得るのが難しい思想であった。「本誌の製本を私共夫婦がやるのは、決して世のつねの物ずきからではない。こうしないと書物らしい書物が生れないからである。私共はただ、真に書物を愛する者が当然なすべき責務を果たしているに過ぎない。だからこれからはもう製本のことはあまり書くまいと思う。黙々と仕事を続けてゆくうちには、書物に対する私の愛がいつか認められる日も来るであろう」（「雑記」『ブレイクとホキットマン』[1931年2月号]）と、本作りにいそむ姿が語られていく。

さらに製本した本の発送のことについてもふれているので、追記しておこう。「何でもない事のようにけれども、百冊づつの包みを両手にさげてゆくのはちよつと骨である。私共は一丁行つては風呂敷包みを路傍へ置いて休み、半丁行つてはまた汗を拭う。道行く人や、付近の中学校の生徒達は、何事かと私共を怪しみ眺めている。こんなことなら、長男の潤をのせて使い古した乳母車を、五十銭で屑屋に下げるのではなかったと残念でならない」（「雑記」『ブレイクとホキットマン』[1931年2月号]）と、書き残しているが、じつは壽岳自身がこの乳母車を買ひもどしにいき、乳母車はまた活躍したという。微笑ましい挿話である。

さらに向日庵本の制作現場からの声に耳を傾けてみよう。試行錯誤の本作りの過程が手に取るように如実

に語られている。そして本作りが手先の作業ではなく精神を傾注するにたる全人格的な仕事であることが明瞭になってくる。

『セルの書』の複製がいよいよ出来あがりました。与えられる限りの時間と、情熱と、そうして反省とを与えて出来あがったものです。このたびは印刷部分を除き、他は全部私共が致しました。即ち一葉一葉の彩飾も、綴じも、表紙の木版押しも、みな私共夫婦の手になったものです。綴じに使った絹糸は、故郷の姉が作ってくれました。彩飾下絵のガラス版をセピアで印刷したことは、もとの蝕鋳版の味を出すうえに、今までの黒い印刷よりずっと効果的であると思います。ともあれ一つの書物を作るために費す苦心は一通りのものではありません。唯そのたびに有形無形の教訓が感得せられて、不思議によきものへの道を拓いてくれることは、体験者のみ知る喜びであろうと存じます。特に表紙は、文学として表現せられた内容にもふさわしいものであらめたいと思って、随分心を砕きました。出雲で純質の黄雁皮紙を作らせ、落ちつきを与えるために雲母がけをし、その上にごく質素な題字を木版で押しました。大字に用いた書体は、私の尊敬する工芸家エリック・ギルが刻んだ活字に基づいて私が書いたもの。能うかぎり無用の粉飾を除き、美をその本源に還そうとするギルの精神は、彼の考案した活字にもよく現れていると存じます。ともあれ、謙遜で、質実で、力強く、しかもどこかに抒情的なしなやかさを持った表紙をと求めて私はここに到りました。忌憚なきご批評を待っております。(『向日庵消息』[1933年])

ここで言及されている本は1789年に出版されたウィリアム・ブレイクの *The Book of Thel* の翻刻であり昭和8年10月1日に130部の限定版で出版された。

さて壽岳自身も自負しているように、数ある向日庵本のなかで『書物』(1936年)こそが最高傑作であることは自他ともに異論がないところである。ここで向日庵本の結晶たる『書物』を仔細に検討してみよう。

『書物』は「理想の書物とはいかにあるべきか」を論述し、壽岳の書物美学の究極をとどめているものとして今日でも評価はきわめて高い。内容はコブデン＝サンダスンの『理想の書物』、エリック・ギルの書物論の翻訳、それにみずからの装幀論を加えた三篇の論

考からなる。(図版6)



図版6 『書物』

1900年10月、ダヴズ・プレス (Doves Press) のコブデン＝サンダスン (Thomas James Cobden-Sanderson) とエマリ・ウォーカー (Emery Walker) が印刷、刊行した小冊子『美しい書物』は、わずかな部数しか出版されなかった。日本では容易に入手しがたく、自然と稀本になっていた。壽岳の推測ではおそらく2冊か3冊ぐらいしかわが国には船載されていないと考えられ、壽岳自身も大変な苦心をしてロンドンの古書肆から入手したという。ギルの書物論とともに、コブデン＝サンダスンの所論を併読すれば、「完全な書物とはどうあるべきかの高い標準が、はっきり把握される」と主張する。「我々の周囲には余りにも無知で乱暴な書物観や装幀論が横行している。論や観にとどまっているだけならまだいいが、実物が横行している。そして一番いけないのは、それらの無知が牢固たる意識に根ざしている」事実こそが病弊のゆえんであると説く。「知らずして犯す倫理上の過失は恕されましようが、美に対する意識した無知に根ざす罪過は恕されがたい」と、さらなる追及の手を止めようとはしない。「さらば罪なき美しさを持つ書物とはどんなものであるか」を、『書物』をして、静かにそれを語らめたいと自論を具体的に見える形で明示したのが『書物』にはかならない。

コブデン＝サンダスンの『理想の書物』の結論部にあたる原文 (Thomas James Gobden-Sanderson, *The Ideal Book or Book Beautiful* [Hammersmith: Doves Press, 1900]) をまず引用して、次に壽岳の訳文を掲げ、その主張するところを検討してみよう。

I conceive the Book Beautiful then as a whole, and I look upon the self assertion of any art within the

limits of the Book Beautiful to be an act of Treason. The proper duty of each art within the Book Beautiful is to cooperate with all the other Arts similarly engaged in the production of something which is distinctly *not itself*, and Sir, as I contend for the wholeness, the symmetry, harmony, beauty, without strain or stress, of the Book Beautiful, so I would place the Book beautiful as I would place any other complete work of art, into acknowledged relation with that whole of life which we aptly call the universe, that complex and marvelous whole which amid the strife of competitive forces supremely holds its own, and moves rhythmically onward through ceaseless time and space in the development of its own Beautiful Being, the archetype of all Books Beautiful or sublime.

「されば美しい書物は、一つの全体として考えらるべきであり、いづれか一つの技術が、この全体を創りだす条件によって定められた限界以上に自己を主張することは、ゆゆしい叛逆の行為と見做されねばならぬ。かかる限界の中でそれぞれの技術が果たすべき適当なつとめは、あきらかに一つの非自己である何物かを創りだすために、他のすべての技術と甲乙なき平等の勤労に服して協働することである。美しい書物の健全さ、均整、調和、張りや無理のない美しさは、そのとき、われわれ自身と全世界とから成立つあの生活の全体、互いに競合うもろもろの力の間にあって、毅然たる自己の面目を保ち、生活の言葉を以てその日その日の彩飾された頁の上に幾世紀もの書冊を書きしるし、限りのない時間と空間とを貫いて、美しいまたは気高いあらゆる書物の真の原型である生活と云う驚くべき物語の十分な展開へ、韻律正しく前進するあの複雑にして美妙的な全体の健全さ、均整、調和、及び張りや無理のない美しさと吻合するであろう」(『書物』)

壽岳がこのようなコブデン＝サンダソンの理想を強く支持したが、コブデン＝サンダソン自身の述懐(“I have set Johnston to work at writing—thus to constitute an associated scriptorium. I have given him, to begin with, my *Tract on the Ideal Book or Book beautiful*, and Milton’s *Sonnets*—also one of the latter to hang on the wall. …What we want is not belief in someone or some-

thing *else*—in which, as critics of belief point out, we may well be duped—what we want is belief in ourselves, and admiration (not belief) for rightness and beauty, let who may simulate or lay traps for us.” Thomas James Cobden-Sanderson, *The Journals of Thomas James Cobden-Sanderson* [London: Richard Cobden-Sanderson, 1926])も壽岳のそれと酷似していたのを知るとき、共通の理想で結ばれた両者にたいして、少なからざる感興を覚えざるをえない。

では、最後に「装本について」と題された壽岳の所論に耳を傾けてみよう——「書物の外形を装いととのえる技術が装本である。従って墨や紙や活字や字體や印刷や綴附や表装がみな装本に関係する。装いは美しさを貴ぶ。されば装本とはまた書物を美しく装う技術である。美しく装うためにはいささかの暢達が装本者に許されるであろう。どこで装本者は、時に本文の空白に鳥を舞わせ、或いは表紙の皮の上に花を咲かせなどする。しかし許されるのは実にいささかの暢達であって、その限度を超えればいかにそれみづから美しいものも書物の美とはならない。否、それみづからの美しさと云うことさえここでは無意味である。美が既に書物と結びついた以上、書物にとっての美は常に一つであってそれ以外にはないから」(『書物』)。

またその主張の最終部でも逸脱・過剰を防ぐのは健全な「常識」以外にはないと説く——「装本を支配する法則は、結局常識に他ならぬことを。嘗て常識が浪漫主義や理想主義から唾を吐掛けられた時代があった。常識が妥協・苟合・折衷など、不徹底を意味する言葉の同意語の如く思惟された時代があった。浪漫主義や理想主義は、嘗て自分が吐掛けた唾を、いま己の面上に受けている。ただに装本の事のみならず、工芸の全般に互って、浪漫主義や理想主義が導き入れた病弊は、資本主義や商業主義が導き入れた害毒と共に著しい。常識はかかる病弊を癒し、かかる害毒を除いて、素直なもとの状態へかえそうと努力する」と、常識のもつ中庸性を強く支持する。常識はありきたりのようにしか作用しないように思えるが、壽岳はけっして常識力を低くは評価していない。なぜならば「凡俗の道のように見えていてそれは凡俗の道ではない。全体と部分との関係を正しく把握する健康な聡明さである。正確な批評の力である。かかる聡明さ、かかる力が、愛と熱情を以て書物の上に灌がれるとき、立派な装本家の仕事は成就されるであろう」(『書物』)。壽岳のこうした見解はなにも装幀にのみ向けられたものではなかった。それは壽岳の書物論全般におよぶ美意識であり態

度でもあったのである。同時に、それは生き方の問題でもあった。

壽岳の美意識は感性のゆらめきではなかつた。同時代の病弊を断罪する鋭い批評眼にもなりえたのである。1933年（昭和8年）、読書界では谷崎潤一郎の『春琴抄』が発表され高い評価を受けていた。だが、文章は日頃から日本の書籍について憤懣やるかたない思いをいっていたため、この名作の造本の粗さを無視することができなかつたのである。「ただ嘆息するばかりの名作で、言葉がない」（川端康成）とまで激賞された『春琴抄』であったが、文章は漆を塗ったような黒い表紙の装幀と造本に不快さを隠そうとはしなかつた。

自己の美学に埋没してしまい自己満足に終始せずに読書界へ現実的な提言を繰り返しかえし忘れない壽岳の態度に、いわゆる「愛書家」という微温的なものが毛頭もないことに気がつくであろう。まず糾弾は、「装幀への関心がありながら、装幀の本質を全然わきまえていない最近の例として、私は谷崎潤一郎氏の『春琴抄』を取る」という非難からはじまり、『春琴抄』の装幀のどこがいけないか。どこもみないけないのである」と全否定の厳しさを突きつけ、「今も言った通り、谷崎氏ともあろうものが、こんな装幀に創作同様の苦心を払ったとは正気では考えられないが、それでは論旨が進められないから、ともかく私は谷崎氏の好みがこの装幀の上に直接に間接に現れているものと仮定して批評する。なるほど谷崎氏が、この装幀の上に一種の美しさを出そうとした苦心は十分にくみとられる」とある程度の譲歩を示しつつ、具体的な批判的分析へと進んでいく。まず漆塗りの表紙意匠をとりあげる——「しかし悲しいかなその美しさは工芸としての健全な正しい美しさではない。病的な歪んだ美しさである。寧ろそれは醜に境を接するといってもよい。背を黒い布にし、表紙を黒い漆塗りにしたのは、恐らく『春琴抄』の基調となっている盲目の世界への、意識的な或いは無意識な連想から来たのであろうが、結果は寧ろ櫛箱か針箱に類するものとなってしまった。光と闇とが交錯する後天的な盲目の世界を、ただ黒の一色で塗りつぶして表現する意匠—装幀者はそう思っていたのではないかも知れないが、与えられたものから受ける感じをのべることは批評家の自由である—の是非はしばらく措き、仮に全部を黒にするとしても、もっと滋味と美しさと強さとがあつて、書物を包むにふさわしい材料はほかにも容易に求められた筈である」と、作品世界の意味を十分に勘案しながらも、「病的な歪んだ美しさ」に耽溺してしまい平衡を欠いた精神を指

弾している。

さらにそのアンバランスな精神は用と美というバランス精神を大きく裏切るものでもあった——「私は唯一回、しかも書物をいつくしむ平素の習慣から、極めて鄭重に繙読したばかりであるが、すでに漆塗りの角々は剥がれてボール紙の生地が醜くはみ出し、金蔦絵の金はところどころ剥落してしまつた」と嘆き、さらにアンバランスの一覧（「見返しのもみ紙と、けばけばしい支那趣味の副題扉とのどうにもならない不調和。更にそれに続く本文の、しらじらした極めて脆弱なコットン紙。本文には全部罫線を引き読みづらゝいまでに多くの変体仮名をつかうほど回顧的な趣味」）を徹底的にあげて批判した。そしてそうした欠陥を埋めるためにどうすればよいかといふ救済策を提示している。

なにゆえに氏は、かかる見戯に類した表面だけの模倣をやめ、もっと真率に、もっと正しく、和書のよき伝統を如実に再現しなかつたのであろうか。私ならば寧ろ本文に楮を生漉きした和紙—その価はコットン紙に比べそう高くない—を用いて袋綴じとし、金蔦絵黒漆塗りの表紙は断然退けてもっとしなやかで強い材料を用い、幾何学的に模様化された一本の対角線を引いてその一方を黒く埋め、書物の表紙としての調和ある美しさを出すと共に、内容の盲目の世界へも謙遜に近づくであろう。書物の内容を重んずると共に、工芸としての書物それ自身の美の完成を細心に顧慮するであろう。幾度となく愛読されても傷つきいたまない強さをいつも念頭に置くであろう。自筆本『蘆刈』の装幀についても言われることであるが、谷崎氏はまだ書物の伝統を十分に了解していない。東洋的なものと西洋的なものとが、随処にいたましい相克を見せ無礙円融の妙境を去ること甚だ遠いのである。恐らくこうした破綻は、書物の「用」を顧慮することなく、ただ「美」をのみねらう不健全な自意識のうちに胚胎するのではなからうか。（「作家と装幀」『新潮』[1934年6月号]）

この厳しい結論においても「用と美」のバランスの重要性を力説し、壽岳の書物論の要諦が示されている。作者である谷崎潤一郎がこの一文を読んだかどうかは不明だが—おそらく読んだであろう—、この装幀をたちまち廃版にしてしまい、再版本は壽岳の教えをいかした造本で出版されたのは興味深い事例になるうか。文は人なり、であり、本もまた人なり、なのだ。

ここまで理解できるように、壽岳は書物を「物」として盲愛する愛書家なる人々をもっとも嫌悪した。向日庵本の再興をのぞむ人々が多くなったとき、こうした書痴といわれるような愛書家を戒める強い言葉を発している——「最後に、私は、日本の愛書家と称する人々に、絶望を、否、時には憎悪をすら覚える。かれらは、一般に蒐集家のもつ共通の弱点から免疫でない。人生において何がもっとも大切であるかの反省は、薬にたくも見出せないようなタイプが、この蒐集家人種には多い。私の軽蔑する人種が大部分を占めている愛書家を目あてに、私版を出すことの意義を認めないのも、また私の自由である。これをもって向日庵私版を復興しないことの弁とする」(「なぜ向日庵私版を復興しないか」『日本古書通信』[1951年6号])。物のために物を愛す、本のために本を愛すという不純な精神が横溢した世界を憎み、昭和26年[1951年]をさかいに向日庵本から退いていったのである。

「向日庵私版書のうち、……まず思い通りに仕上がったと自負できるのは昭和11年刊の『書物』だけである」として、文章は「綿密な注意と万全の準備のもとに」、自らの「理想の具現化」できたことを後年に告げている。だが同時に、私家版の刊行が戦争に傾斜していく国家体制への「反抗」であったと指摘している——「いまふりかえると、私が向日庵本作成に情熱を注いだ期間は、日本国政府が英語や英文学の学徒を国賊のように言いくたし、大学の英文科が次々ととりつぶされた時期にあたる。その間私は、こつこつと十数冊の限定本づくりに励み、熱心な読者に直接頒布した。出版法の規定からすれば、内務省への納本が義務づけられていたけれど、私はあえて納本しなかった。出版の自由を当然とする信条の、国家体制へのささやかな反抗である。それに、国家権力の上にあぐらをかく内務官僚どもに、心血をそそいだわが手づくりの本を渡してたまるか、との気概も私にあった」(「わが『書物』の思い出」『本の本』[1976年11月号])。

向日庵を日本のケルムスコットにという願いをこめて、新村出が1934年に口述筆記した一文がある。「同君(壽岳)は、西向日町をケルムスコットとしようとして徐々に努力してゐられるのではなからうかと想像されます。よしやモリスの一面でもが京都の郊外に伝えられれば、以てモリスを記念するに足るこよなきわざだとかんがえるのであります。私は嘗て近世初期の新人、本阿弥光悦をモリスに比したことがありました。光悦は洛北、鷹ヶ峰に新しき村をつくりましたが、向日町あたりの新しき村に、モリスのような偉人の余光によっ

て新しき芸術的事業が昌えれば結構だと存じます」(「モリスを憶ふ」『モリス記念論集』[1934年])。新村の願望はある程度まで実現したのではなからうか。

「新しき芸術的事業」ばかりか、向日庵はいわば文化的サロンとしても機能していたからである。柳宗悦、浜田庄司、河井寛次郎、芹沢銈介、黒田辰秋、棟方志功、バーナード・リーチ、伊藤長蔵、大賀壽吉などといった日本文化を支えた綺羅星のような人々が向日庵を訪れていた。

そして同時に向日庵は民間外交の舞台でもあった。英国大使ジョン・ピルチャール、和紙研究家ギルバートソン、書物研究家カール・ケラー、出版人グラウワー、英国詩人エドモンド・ブランデン、D. J. エンライト、天皇の家庭教師ヴァイニング夫人、さらには平和運動家ロンズデール、など枚挙に暇がない。文化は異文化が交差したところにさらなる輝きを発するとするならば、これほど輝かしい光に満ちたところはなからう。

むすびにかえて

——エコロジストとしての壽岳文章

壽岳と静子夫人の出会いは双方にとり、人生のかけがえのない転機となった。夫人の兄である岩橋武夫は、『失樂園の詩的形而上学』(1933年)を著わしたミルトン研究者であると同時に、後年に日本ライトハウスを創立した社会事業家でもあった。早稲田大学理工科に進学したが原因不明の高熱が二日ほどつづき、失明してしまう。岩橋は、早稲田を退学したのち関西学院高等部文科に進学するが、兄の杖代わりになりつき添っていたのが妹の静子であった。兄の看護のために学業を断念しなければならなかった静子夫人は、壽岳から英語の指導を受けるようになり、文章の奨めにより静子夫人は、岩波文庫のために、今日でも版を重ねているW・H・ハドソンの翻訳書『はるかなる国ととおい昔』(1938年)を出版する。

壽岳は多くの翻訳書を出しているが、選択されたギルバート・ホワイト、ハドソン、ジェフリーズといった作家の作品群を視野に入れたとき、自然環境保護者としての側面が浮きあがってくる。訳書の選択には非常に厳密な筋が通っていたことになる。じっさい、ことあるごとに現代の環境破壊を嘆いたが、ひるがえれば人類史上はじめて工業総生産が農業総生産を追い抜いてしまった産業革命の国で、詩人ウィリアム・ブレイクが作品のなかで呪詛したのも反自然なものであった。(図版7)

ある日の壽岳家の一夕を、娘の目を通じて母が描い



図版7 ブレイク

ている。「この日父さんはファーブルの『昆虫記』に読み耽っていました。……夕餉のあとで話しました。読んだ本のことを。忘れがたいあの事この事を母さんに話して聞かせるのは、私たちが結婚して以来父さんのならわしとなっていました。この父さんの習慣は、不幸な家庭の事情から女学校の過程も終えていず、またとても父さんほどに読書の時間が持てない母さんにとっては、楽しみながら内なるものを育てる有難いことだったのです。『実に面白い書物だ。子供に読ませるためにもこれに優る書物はそう多くはあるまい。思いあがった人間に、その踏みつぶされる昆虫の音が、どれほどか誠実で、かしこくつましやかであるかを知らせている。また人間の恐ろしさを、いかに昆虫によって反省しなければならぬかを教えてくれる。しかもそれを言い現わしているプロヴァンス地方の言葉の美しさは、田園や昆虫の世界にこの上もなく似つかわしく感じられた。』父さんはこんな意味のことを、ファーブルの『昆虫記』について話してくれました」（壽岳しづ『歳月を美しく』[1949年]）。こうした挿話にも自然に生息するものへの愛情に対する姿勢が強く打ち出されている。ここで注意しなければならないのは、<微小なもの>と、<生命という永遠なもの>との対

比のかたちをとって、文章自身の視線がそそがれていることである。

人生をいかに生きるか、この問いに対して、壽岳文章は「用にして美になる」という哲学でもって生涯をつうじて応えようとした。戦時期に台頭してきた国家主義と対峙したときも強いその意思がつかぬく個人主義でもって生き抜いた。たえず超自然なものへの敬慕を忘れずに、人間の不完全さを戒めるという考え方がブレイクからもっとも学んだものではなかったか。ここに壽岳が帰依していた仏教の教義とブレイクの神秘主義との類縁性が認められるのである。若き日の文章がブレイクについて、すでに同様な指摘をしていた事実を最後に想起しておきたい——「古い英文学史の片隅には、僅かには2, 3行の記述しか与えられなかった彼も、今は多くの研究者の懐に暖かい座席を占めつつある。その昔彼自身が The earth from sleep… / Shall arise and seek / Fer her Maker meek…（起き出でて求めむ / そがやさしき造物主を）と歌った時代がきたのである。殊に直覚と想像とを豊かに恵まれている我等東洋人には、ブレイクこそまことにいみじくなつかしい詩人である。あの Beethoven のまなざしに酷似していると言われる彼の顔には、どこかわが古代の芸術家が木彫した明王や菩薩の面影に通うところがありはしないか。そうも私には思われてならない」（[壽岳紫朗]「William Blake の『法悦の歌』」『英語研究』[大正13年9月号]）。

追記 本稿は、2010年10月16日に向日市で開催された講演「壽岳文章 人と仕事」の草稿に加筆、訂正したものである。講師に推挙して下さった甲南大学名誉教授、宮城公子先生に満腔の謝意をささげる。また、壽岳文章、静子ご夫妻の写真をお貸し下さった壽岳和子さまに感謝したい。そして2011年9月14日に逝去されたご子息、東京大学教授であられた天文学者、壽岳潤先生のご霊前に本稿を捧げたい。